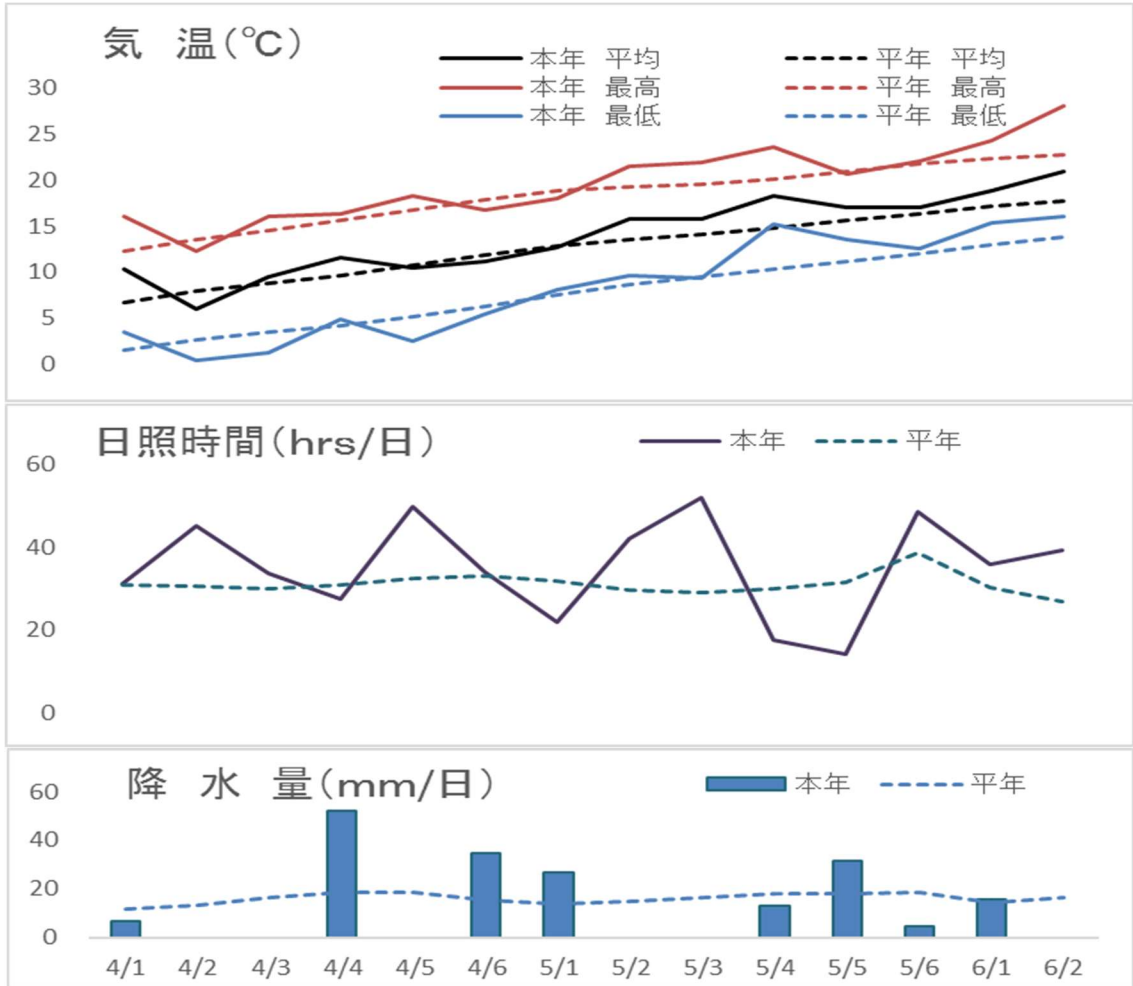


～田植後は高温傾向で推移し、初期生育は概ね平年並み～

1 令和3年の気象(古川アメダス)



〔1か月予報:気温, 降水量, 日照時間の確率(%) 東北地方〕 6月12日～7月11日

・平年と同様に曇りや雨の日が多い。向こう1か月の平均気温は、高い確率50%、並の確率30%、低い確率20%。降水量は、高い確率30%、並の確率40%、低い確率30%。日照時間は、高い確率40%、並の確率30%、低い確率30%。

2 生育状況(6月10日) [宮城県古川農業試験場・農業改良普及センター調査]

- ・草丈は、28.1cmで平年比98%である。
- ・茎数は、㎡当たり229本で平年比92%となっている。
- ・葉数は、6.8枚で平年より0.3枚ほど少ないが、概ね平年並みと思われる。

県全体	草 丈		茎 数		葉 数		葉 色	
	本 年	平年比	本 年	平年比	本 年	平年比	本 年	平年差
	(cm)	(%)	(本/㎡)	(%)	(枚)	(枚)	(GM値)	(GM値)
	28.1	98	229	92	6.8	▲0.3	40	1.0

※平年差比は過去5か年平均値(平成28～令和2年)より算出

3 今後の管理

(1) 水管理

- ・5月前半に移植したほ場では分けつが進み、目標茎数が確保されつつあるほ場もある。目標茎数に達したほ場では、根の活力向上や土壌の地耐力向上のため、中干しの実施を計画する。
- ・5月後半に移植したほ場では目標茎数に達していないところが多いので、水深2～3cmの浅水管理を行い分けつを促進する。
- ・稲わらなど、未熟有機物が多く施用されているほ場では、硫化水素などの有害なガスが発生しやすい。特に、まとまった降水により長期間にわたって湛水状態にあるほ場では、その傾向が強いので、時々落水してガス抜きを実施する。

(2) 補植用残苗の処分といもち病の予防

- ・6月10日の調査時点でも、多くのほ場で残苗が放置されている。本田でのいもち病の発生源になるので、速やかに処分する。
- ・いもち病予防に箱処理剤を使っていない場合は、確実に水面施用剤を散布する。
- ・葉いもちは、収量や品質に影響を及ぼす穂いもちの伝染源となる。水田をよく観察し、いもち病の早期発見・早期防除に努める。

(3) イネドロオイムシの発生予報と防除のポイント（宮城県病害虫防除所 発生予察情報より）

病害虫名	発生時期 (産卵盛期)	発生量
イネドロオイムシ	やや早い 6月第1半旬	やや多



- ・箱処理剤を使用した場合は、原則として本田での防除は必要ない。
- ・箱処理剤を使用しなかった場合は、以下の要防除密度を目安に防除を実施する。

～～ 産卵盛期の卵塊密度で 100株当たり80個～～

(4) 斑点米カメムシ対策

- ・畦畔や雑草地・牧草地等のイネ科雑草は、斑点米カメムシ類の増殖源となる。
- ・計画的な草刈りを行い、カメムシ類の増殖を抑制する。
- ・水田内にイヌホタルイ、ノビエ等が多く残草していると、斑点米の原因となる「アカスミカスミカメ」が増殖して被害が助長される傾向にある。残草が目立つ場合は、中期・後期除草剤で追加防除を実施する。



クモヘリカメムシ画像【宮城県病害虫防除所ホームページより】

◆大型の斑点米カメムシ類の一種である「クモヘリカメムシ」が宮城県南部だけでなく県北部でも確認され、分布域が拡大している。本種は、越冬地である針葉樹林が近くにあると発生確率が高まる【宮城県「普及に移す技術」第96号より】。今後、県内での発生拡大が懸念される。